

だいこん抽だい回避のための温度指標

図試 高冷地開発センター

1. 背景とねらい

だいこんは県内で 2,000ha以上の作付があり、7月以降の夏だいこんの出荷量が多くなっている。だいこん産地は新規開発畑に展開し、高標地における栽培が多くなってきており、気温条件の変動による抽だいの発生も考えられる。抽だいの発生の条件は品種によって大きく異なることから、品種の抽だい特性を考慮して品種選択をする必要がある。

そこで、抽だいの危険を回避するため、抽だいが発生する温度条件を主な品種について検討したところ、実用可能な成果が得られたので指導上の参考に供する。

2. 技術の内容

県内の主要な夏秋どりだいこん品種における、抽だい回避のためのは種時期の温度指標は以下のとおりである。なお、抽だいの発生が50%をこえなくなる時期を限界は種期、抽だいの発生が10%以下になる時期を安全は種期とした。

(1)いわて青首

限界は種期 は種後20日間の日平均気温の平均が12℃となる時期

安全は種期 " " 13℃ "

は種後10日間以内に13℃以下の低温に150時間以上遭遇すると、上記の条件であっても抽だいの可能性は高くなる。

(2)宮小町

限界は種期 は種後20日間の日平均気温の平均が16℃となる時期

安全は種期 " " 17℃ "

は種後10日間以内に13℃以下の低温に120時間以上遭遇した場合、50%以上抽だいするおそれがあるが、60時間以下ではほぼ発生しない傾向が認められる。

(3)耐病総太り

限界は種期 は種後20日間の日平均気温の平均が18℃となる時期

安全は種期 " " 19℃ "

は種後15日間以内に13℃以下の低温に20時間以上遭遇すると、上記の条件であっても抽だいの可能性は高くなる。

(4)適用地域および作型 県北部、無マルチ夏秋どり作型

3. 指導上の留意事項

(1)抽だい回避のための温度指標による限界は種期、安全は種期は、現地気象の実測値やリアルタイムメッシュ等の気象情報から求め、標高のちがい等による気象条件の変化に対応した抽だい回避や地域毎の作型作成の指標とする。

(2)は種後の気象の急変によっては不時抽だいを起こすこともあるので、限界は種期ぎりぎりの種は避ける。また、は種後の低温遭遇時間による抽だいの発生は、あくまで目安として利用する。

(3)抽だいに不十分な温度条件であっても、生育期が高温になると花茎が伸長する場合もあるので、生育期後半が高温となる6月は種の作型では適期収穫に努める。

(4)だいこんの生育特性は品種によって異なるので、抽だいのおそれのない範囲ではその時期に適した品種を利用する。

4. 試験成績概要

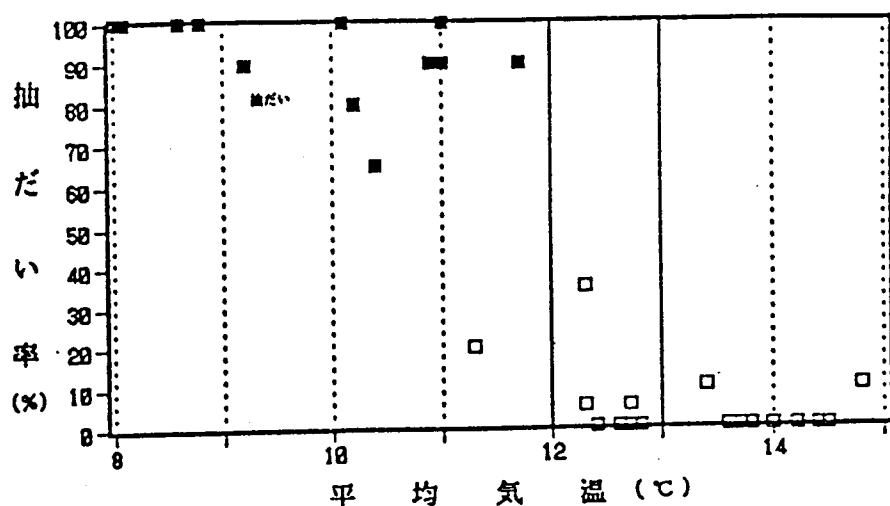


図1 は種後20日間の日平均気温の平均と「いわて青首」の抽だい

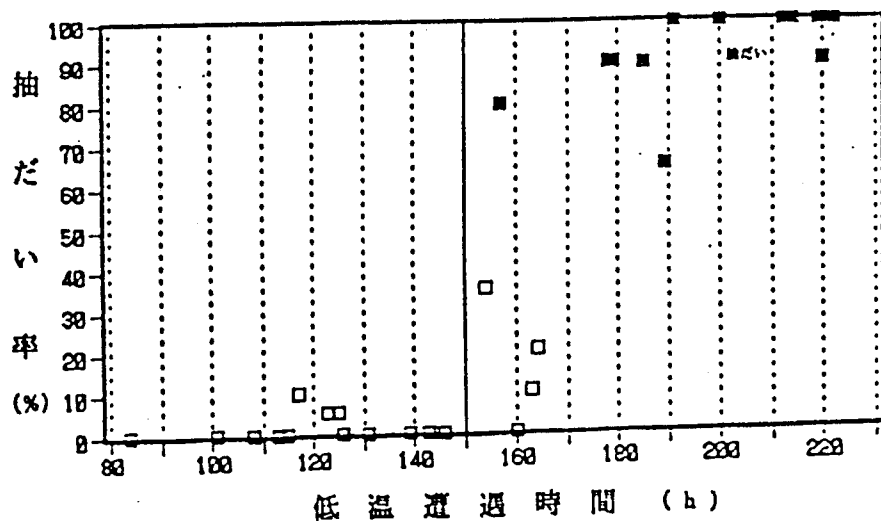


図2 は種後10日間の低温遭遇時間と「いわて青首」の抽だい